



(株)ブンシジャパン

食品工場の現場ニーズ発見、衛生装置を連携で開発した商社



地域活性化

独立行政法人中小企業基盤整備機構 中国支部 連携推進課

チーフアドバイザー 藤井誠一

現場で聞いた顧客 ニーズのサービス化、 商品化を模索

(株)ブンシジャパン（山口県周南市）は、包装資材の商社として地元を中心に小売店から工場までさまざまな業種の企業と取引を行ってきた。

藤村周介社長が特に重視をしてきたことは、自らも現場を回り、顧客の声に耳を傾けることである。その方針を営業マンにも徹底。情報の積み重ねから食品工場における衛生管理業務にニーズを見出し、HACCPやISO22000の認証取得のためのコンサルティング事業を二〇〇五年にスタートさせた。

認証には、衛生管理などに関する継続的な職員教育が発生するが、中小の食品工場では、これら衛生管理業務の維持に専用スタッフを投入することが困難なため、これを請け負う業務も開始した。

これらコンサルティングとそとの付随業務の受託は「IHPコンサルティング事業」として、現在では同社の事業の柱の一つとなっている。

食品業の環境衛生を 実現する二つの装置

こうした顧客の困りごとを解決する姿勢をさらに発展させることで、同社では自らものづくりまで手掛けるようになった。食品工場向けの衛生関連装置を開発、経済産業省の異分野連携新事業分野開拓計画に係る認定を受け、全世界へ向けて販売することとなったのである。

当該事業における現在の商品は、ベルトコンベアの除菌を自動で行うベルト除菌クリーニンク装置「アンベル」と、目視で



食品を流しながら同時にベルトを除菌する「アンベル」

企業データ



藤村周介社長

本社 山口県周南市清水2-3-7
☎ 0834-62-2575
<http://bunshi.co.jp/>
業種 包装資材の販売、食品業の衛生管理のコンサルティング、機器開発・販売
創業 1957年2月
設立 1984年1月
資本金 2200万円
年商 23億円
従業員数 86名

行う異物混入検査を助けるLED搭載拡大ルーベ装置「パイロット」の二つである。

消費者の安全意識の高まりもあり、食品工場では、食中毒や異物混入など健康に影響を及ぼす問題が経営上の大きなリスクとなっている。問題を未然に防止するため、衛生管理への取り組みは重要だ。

ベルトコンベアに食品を乗せて流す弁当や総菜などの製造工程では、これまで各アイテムの生産終了後にいったんラインを止めて、作業者がベルト上にアルコールを噴霧して布で拭くな

どの手作業で除菌してきた。その点「アンベル」は、回っているベルトコンベアの下部に着目。上部で食品を流しながら、下部では裏側に回ってきたベルトに専用アルコール除菌剤を噴霧、スクレーパーで残渣をかき取り、不織布で拭き取りを行う。手作業に頼らず、かつラインを止めることなく、汚れの除去・除菌を確実にを行うことを可能にした製品である。

もう一つ、食品業界の日常的な問題に異物混入がある。クレームの多くが異物混入に関わるもので、これは商品ブランドの失墜・補償問題・取引停止などの大きなリスクをはらんでいる。



見やすさが評判の「バイルック」

このため食品工場では、金属探知機・X線検査機・画像処理検査機などの装置を導入して対策に努めている。しかし、髪の毛など、人体の一部や虫などの生物はこのような装置で完全に取り除くことは困難であり、多くの現場で目視検査が実施されている。「バイルック」はこうした目視検査の正確性と効率をアップするための製品である。

「レンズが歪んで見づらい」

「手で照度調整ができるようにしてほしい」といった現場の声に答え、大型三〇センチフレネルレンズに最新LED四十八個を搭載。視野の広さと無影を実現した。このような目視検査は、食品工場にとどまらず、さまざまな精密部品を取り扱う工業系メーカー等でも行われており、周辺への展開が期待できる。

持ち前の行動力が 企業・組織を結びつける

二つの商品はともに藤村社長が、顧客との情報交換の際に聞いたニーズから、装置の基本構造がひらめき、開発に着手したものであるという。

「アンベル」においては、二〇〇八年末の構想図に始まり、

メーカーとの度重なる打ち合わせを経て、〇九年秋には第一回目の試作品が完成した。これをプロトタイプとして展示会に出版。そこで受けたさまざまな相談や意見を参考に改良を重ねる。

一〇年春には第二回目の試作品を新たな展示会に出展し、さらなる改良のアイデアを得た。そして、一一年初頭には除菌機能

を高めた標準品とコストダウンのニーズに応えた簡易品の二つの商品化に成功し、このたび販売を開始することになった。

ブシジャパンはもともと商社であり、技術開発の機能を持っていない。装置の構想を商品として実現するには、製造に関わる専門性を有した外部のパートナーの協力が必要だった。

「アンベル」では、基本性能面で徳機株が大きな力になった。

このほかにも、制御盤、噴霧ノズル、除菌用不織布、アルコール製剤など、各部位における開発課題に対して、全国のメーカーを自らの足で回って打ち合わせを重ね、それぞれ開発の協力

を得てきた。「バイルック」においても、同様である。

今回の異分野連携新事業分野開拓計画では、同社がコア企業として全体を統括し、徳機が装置の設計・加工・製造を担い、(株)ヤナギヤが全国の食品素材メーカーへの販路開拓を行い、(株)寺岡精工が全国ならびに欧州の食品惣菜メーカーに販路開拓を行う、という連携枠組みを構築した。

そのほかにも多方面に協力者を得てきた。経営面では山口県中小企業団体中央会、技術開発では山口県産業技術センター、金融面では商工中金徳山支店、韓国での販売面ではセギシステム(株)などの協力を得ている。

このように多くの組織から商品化への活動を好意的に受け止められるのは、積極的で前向きな行動力が周囲を動かすためと考えられる。藤村社長の食品業界のニーズに耳を傾ける姿勢はますます旺盛であり、いくつかの新しい商品の開発も進んでいる。さらなる市場投入に伴い、新しい商社のあり方を世に問いかけようとしている。